

こまんばん
駒場遺跡発掘調査の概要

1 立地と環境

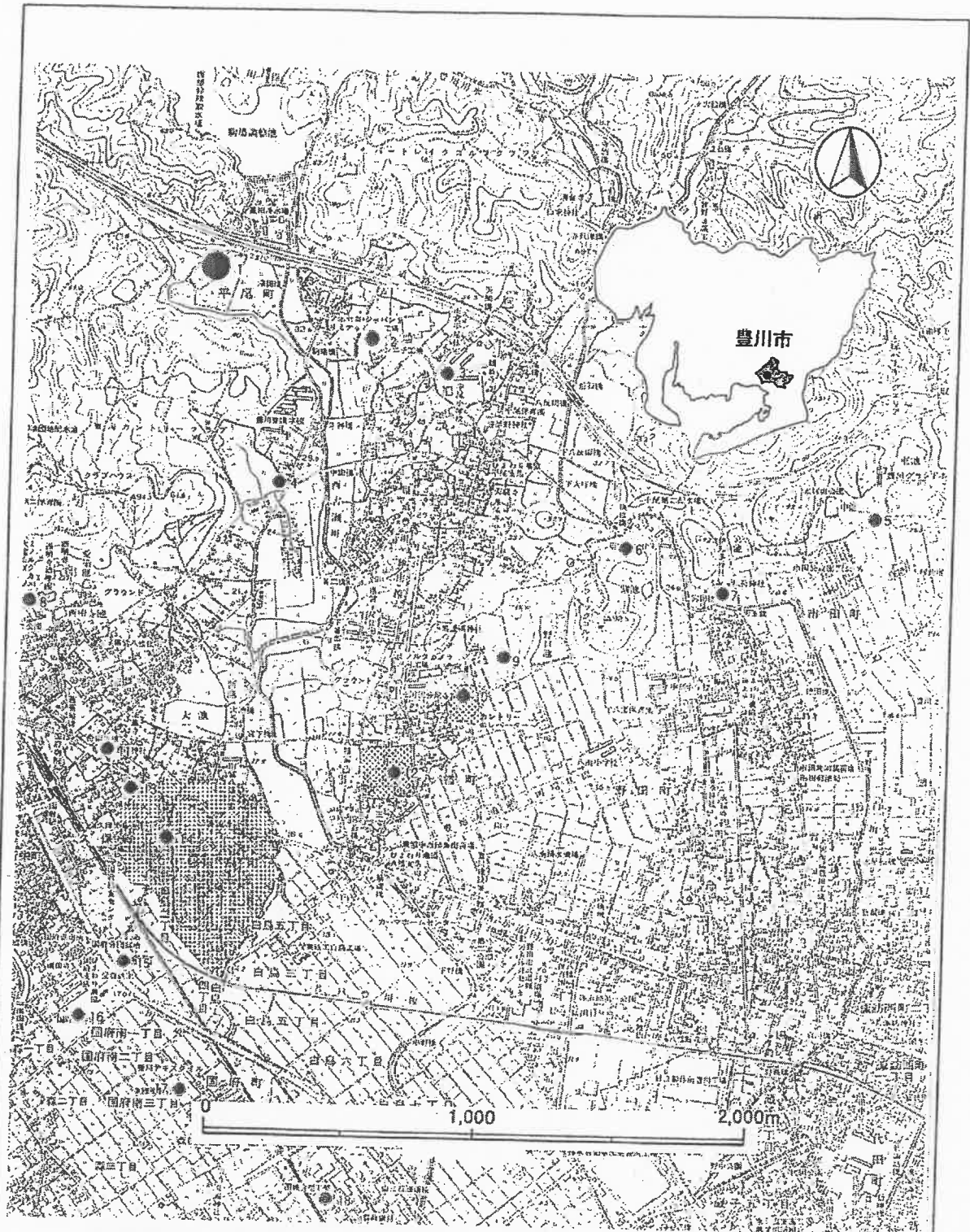
駒場遺跡の所在する平尾町は、豊川市の北部面に連なる北部山地山麓の古期扇状地上に位置し、標高は25～35mです。この扇状地には水田地帯が広がり、現在でも農業経営の盛んな地域、また、自然環境豊かな地域として知られています。

この平尾町の北部の南に面したなだらかな斜面上に駒場遺跡は立地し、まわりの谷地形の面とは約3mの比高差があります。当時の環境を推定すれば、水の便は良く、南向きの日当たりの良い台地上であることから、生活を営むには最良の場所であったといえます。

また、周辺に目をむければ、全長94mで三河地域最大の前方後円墳である船山古墳(上宿)や律令時代の政治・文化の中心地である三河国府跡(白鳥町)、国分寺・国分尼寺跡(八幡町)などがあり、この地域が古墳時代から律令時代にかけての中心地であったことがうかがわれます。

2 発掘調査の概要

この遺跡の存在する豊川市平尾町は、土地改良事業(県営ほ場整備事業)の行われていなかった地域でしたが、数年前から事業化され、駒場遺跡にかかる部分は平成7年度の工事着手が計画されました。これをうけて豊川市教育委員会では、遺跡の一部が工事により影響をうけることから、平成6年度に遺跡の範囲を確認するための試掘調査を行い、平成7年度に記録保存を目的とした本調査を実施したものです。



1. 駒場遺跡 2. 天間遺跡 3. 天間古窯跡 4. 門田遺跡 5. 赤塚山古窯跡 6. 野口城跡
7. 伊知多神社遺跡 8. 西明寺西古窯跡 9. さんまい山古墓 10. 三河国分尼寺跡
11. 船山第1号墳 12. 三河国分寺跡 13. 久保古墳 14. 白鳥遺跡 15. 坊入遺跡
16. 国府高等学校遺跡 17. 船原遺跡 18. 是区田遺跡

本調査の調査区の設定にあたっては、平成6年度の範囲確認調査によって明らかとなった遺跡の範囲で、工事により影響を受ける部分を調査対象地としました。これにより集落の約3分の2が対象地となったため、集落の全体像をほぼ捉えられる発掘調査であったといえるでしょう。

調査は5月23日から開始し、11月中旬をめどに終了する予定です。今回の調査は、期間も非常に長く、調査面積も約4,600㎡と過去の市内の発掘調査のなかでも最大規模であり、期間・面積からも規模の大きな発掘調査でありました。このような大規模な調査では一度にすべてを調査することが不可能なため、便宜上A～F地点の6箇所を分けて、調査を進めました。

3 確認された遺構・遺物

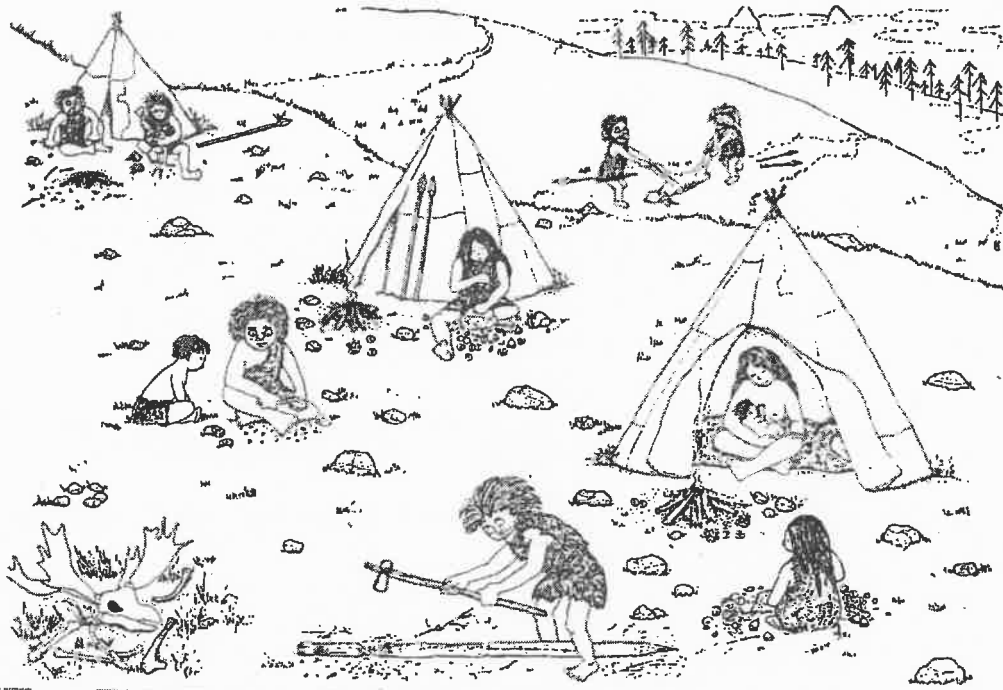
駒場遺跡は一時期に人々の生活の営まれた遺跡ではなく、人が住んだり、住まなくなったりの繰り返りで形成された遺跡です。その歴史は、古くは1万年を超える気の遠くなるような大昔から、17世紀代（江戸時代）にいたるまでの長い時間幅をもっています。

その中でも、特徴的にあげられるのは旧石器時代（今から約1万数千年前）と古墳時代中期（約1500年前）の2時期です。この二つの時代の確認された遺構・遺物をまとめると以下のとおりです。

旧石器時代

旧石器時代は、縄文時代に先立つ時代で、まだ土器が用いられていなかった時代です。この時代の特徴を一言で言うと、今よりもかなり寒くて乾燥していたと言えます。2万年ほど前がもっとも寒く、海面は今より140mほど低くて、大陸とはつながっていました。1万2千年ほど前に氷が解けて海面が上昇し、「日本列島」は島となって、現在の姿に近くなったといわれています。

駒場遺跡で出土した石器類は、その形態から約1万3千年～4千年前のものであることが分かっていますので、この遺跡で生活していた人々は、現在とはかなり違う環境のなかで生活していたのでしょう。出土した石器類を細かくみていくと、生活のかたである狩猟のために用いられた槍の先（尖頭器）、木や骨、皮などを切ったり、削ったり、また動物を解体するために用いられた削器や搔器（スクレイパー）などが確認されています。



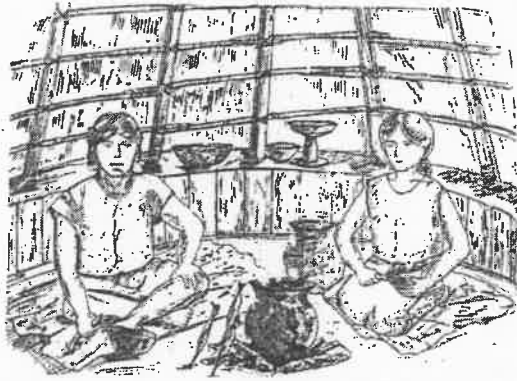
また遺構としては、食物を加熱料理するために用いられたと考えられる礫群が検出されています。

古墳時代中期（約 1500 年前）

古墳時代の大規模な集落の調査としては、昨年に調査を行った天間遺跡（平尾町）に引き続き市内では2例目ですが、今回の駒場遺跡のほうが天間遺跡より約1世紀古いことが調査により判明しています。

今回の調査では、この時期の竪穴住居跡が合計で27軒（試掘調査を含めると29軒）、掘立柱建物跡が3棟、溝・土坑などが確認されました。

このなかで特徴的なものは、建物住居跡であり、これらの建物住居跡をみると、カマド（煮炊き用施設）を持つものと持たないもの、あるいはカマドと炉を両方持つものが混在しています。これらの意味するものは、ちょうどこの駒場の集落が炉からカマドへの移行期のものであることを物語っています。一般的にカマドの導入は5世紀中頃から6世紀中頃とされていますが、調査例の少ない愛知県内にとっては、これを裏付ける貴重な調査例といえます。

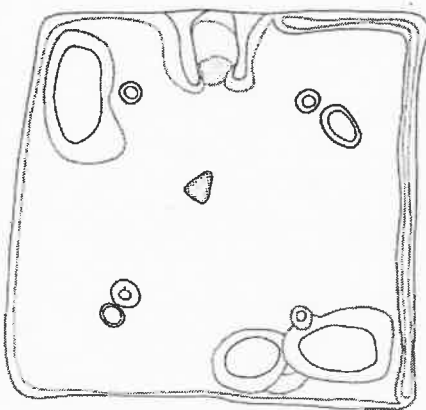


炉を用いた竪穴住居

縄文時代から古墳時代中期までは床でそのまま薪を燃やした「炉」が、暖をとったり、煮炊きするための施設でした。駒場の集落でも約半数が、この炉を用いた竪穴住居です。

カマドを用いた竪穴住居

古墳時代中期に当時としては画期的な施設といえる「カマド」が登場してきます。これにより、煮炊きの熱効率は飛躍的にアップしました。つい数10年前までは、この形態とほぼ同じ「おくど」などと呼ばれるものが、どこの家庭にもありました。



駒場遺跡の竪穴住居跡 S H001

この竪穴住居跡はA地点から検出された比較的残りのより家で、他の竪穴住居跡と違い、炉とカマドが共存しています。おそらくこの家を建てた時には炉を使用しており、カマドの導入とともに、カマドに造り替えたものではないかと思われます。この竪穴住居跡の時期は、その出土遺物から5世紀末頃と推定されます。

4 まとめ

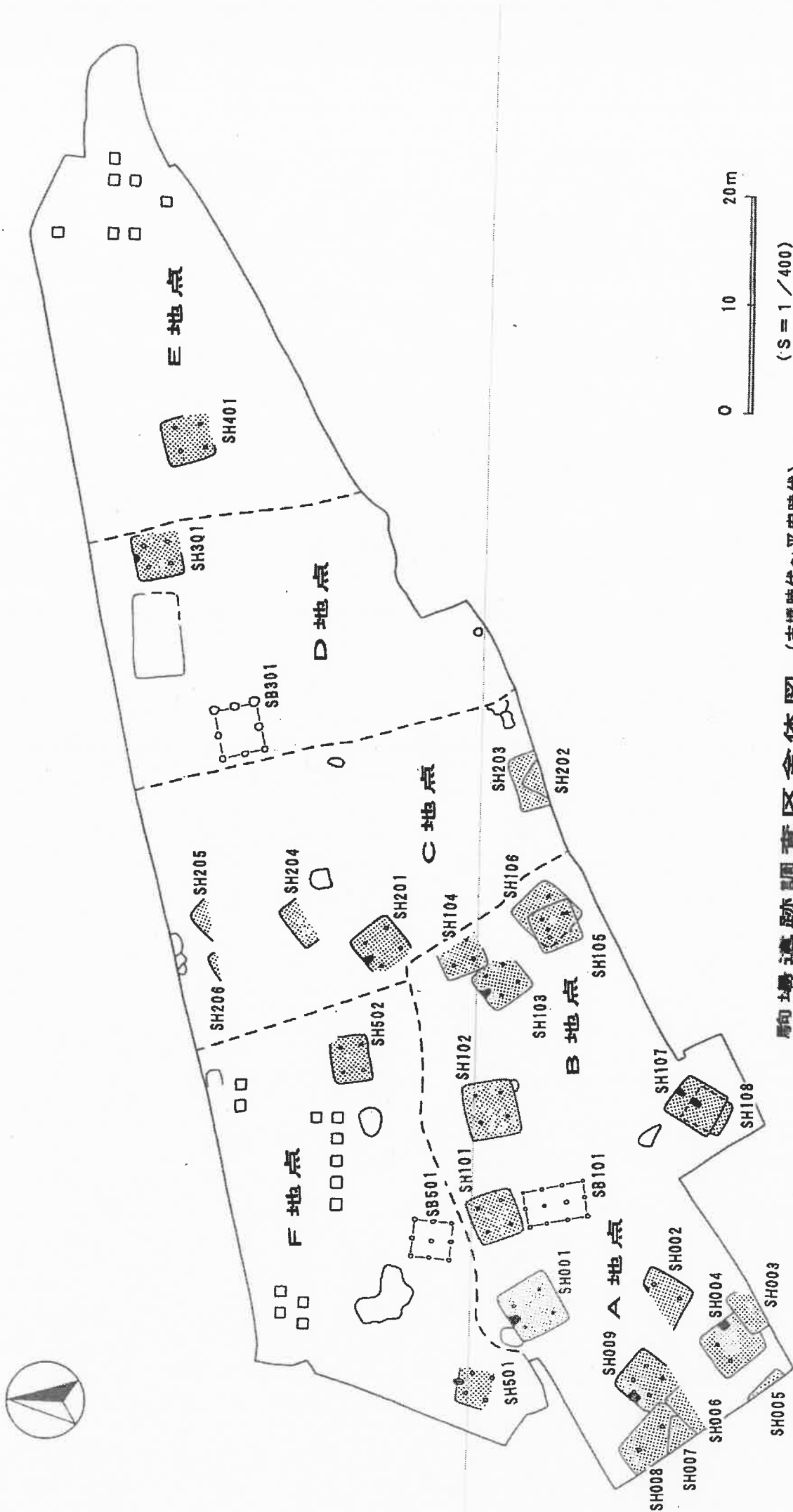
・ 駒場遺跡の発掘調査もいよいよ終わりに近づき、この遺跡も多くの事柄を語ってくれました。

その中でも大きく分けると、つぎの二つが大きな調査成果といえるでしょう。

一つめは、旧石器時代の石器が良好な形で出土したことです。今回出土した石器類は、元位置を保っており、純粋な旧石器時代の層のなかからの出土であることが意味をもっています。通常ですと、攪乱された土のなかや表面採集という形で出土する場合のほうが圧倒的に多く、今回のような出土のほうが稀です。出土状態がよいということは、当時の生活を復元する材料が多く、たくさんの事柄をわたしたちに教えてくれます。

ちなみに、愛知県内では純粋な旧石器時代の遺構面が確認されたことが今までになく、県内初の旧石器時代の調査となります。

二つめは、古墳時代中期の竪穴住居跡が多く検出され、カマドの導入の時期がほぼわかってきたことです。確認された住居跡にはカマドを持つものと、持たないものとが存在し、中には両方をもつ特殊な住居跡も確認されています。これらの住居跡の出土遺物から時期をみると、カマドの導入期が5世紀の終わりの頃となり、調査例の少ない県内では、時期を特定できる貴重な調査例といえます。



馬場遺跡調査区全体図 (古墳時代~平安時代)